

臨床福祉専門学校
言語聴覚療法学科 教育課程編成委員会 議事録

日時：平成 26 年 2 月 6 日（木） 14：00～15：00

場所：臨床福祉専門学校 201 教室

出席委員及び所属

福澤 理（NPO 法人 日本補聴器技能者協会副理事長）
新井 英希（一般社団法人 日本補聴器販売店協会常務理事）
赤生 秀一（一般社団法人 日本補聴器工業会理事長）
川端 右子（メドエルジャパン株式会社）
内野 滋雄（臨床福祉専門学校 学校長）
内藤 明（臨床福祉専門学校 副校長兼言語聴覚療法学科学科長）
萬崎 保志（臨床福祉専門学校 事務次長）
樋口 豊朗（臨床福祉専門学校 教務主任）
小室 加奈子（臨床福祉専門学校 学務課）

（内野学校長挨拶）

専門学校では学会や研究会というものはあまりないようだが、本校では日本一の専門学校を目指すという若い教職員の熱意を受けて以前から取り組んでいる。産学協同の枠組みの中で実学としていいものを作ろうと文科省の委託研究に取り組んだ経緯もある。

今回は、教育・運営に関するサジェスションやお知恵を拝借したく会を設けさせて頂いた次第である。（内野）

（内藤学科長挨拶）

今後日本の状況を踏まえて、お互いの利益になる良いものを協力して作っていききたいというのが基本的姿勢。

本学科は昨年 1 2 月に関東信越厚生局に新カリキュラムの申請を行ったばかりであるので、まずは「聴覚障害分野（8 科目）」について、授業運営の中で各団体・企業間とどのような連携が可能か具体的に検討したい。

（各委員からの意見）

1. 前回からの補足

- ・補聴器業界（認定補聴器技能者）との整合性を精査し、お互い利益を見出せるような内容をみつきたい。 （赤生委員）
- ・業界としても、認定資格が伸び悩んでいることは事実であり、補聴器業界が今後どうしていくべきなのか見つけなおすチャンスの場合であると捉えている。 （福澤委員）
- ・病院から求人ニーズとして、「聴覚」の分野に興味を持つ人を求める声を良く聞く。求人を取り持つだけでなく、中身に関わることがありがたい。 （川端委員）

2. 補装具を巡る状況

- ・補聴器の普及率は10%半ば。この数値の低さには、日本固有の医療システムや福祉行政システムにおける特質が影響している。(赤生委員)
- ・今は“動ける方”に対して店頭販売が中心であるが、介護を必要とする方々までそのニーズが拡大しつつある。福祉現場における介護職の方々は補聴器に関して知識がないため、ネガティブな思い込みもあって受け入れてもらえない現実がある。要介護者と介護者が補聴器に関する正しい知識の啓蒙の具体化に悩んでいる現状がある。そこに言語聴覚士が携わる事は、販売業界にとってプラスになる。(福澤委員)

3. 現実的な言語聴覚士養成への補聴器・人工内耳業界からの協力体制について

- ・今回、小児の基準が変わる為、この分野において人材が必要とされてくる見込み。病院などでは子供の評価をできる人材を求めている。(川端委員)
- ・学校側も、認定補聴器技能者のカリキュラムについて理解を深めて頂きたい。(赤生委員)
- ・認定補聴器技能者養成課程では、市販の教科書はなく、日々最新の情報にアップデートしたオリジナルのテキストを使用している。(福澤委員)
→そのような産業界のタイムリーな情報を言語聴覚士養成に提供して頂けることを是非望みたい。(内藤)
- ・昨年、授業を一部担当したが、次年度担当できるならばまた内容は変わってくるだろう。次回は手(身体)を動かせるような内容を教えてみたい(川端委員)
→とてもありがたい申し出と受け止めている。(内藤)
- ・補聴器技能者養成カリキュラムの中に実習を入れるという案もあったが、受け入れや運営面で困難に直面し、うまくいかない。お試し程度ならばいいが、全国で500~600名規模の恒常的な実習運営は現実問題として困難である。(福澤委員)
- ・本校のクリニックを、患者の了解を得た上で補聴器技能者の学びの場として提供したり、言語聴覚士との連携が取ることによって双方の学びの連携を構築できないものか考えている。(内藤)
→具体的な担当業務や学びの切り分けが運営上可能か、留意する必要がある。(赤生委員)
- ・委員の方々に、聴覚障害領域の中で一コマでも補聴器をとりまく今の状況や課題、将来展望などを講義頂くような機会を頂くわけにはいかないか。
→メーカーサイドとしては、工業会に持ち帰って総意を確認する必要がある。今提供されている情報だけではなかなか判断しにくい。(赤生委員)
- ・言語聴覚士—認定補聴器技能者間での立場上で相当の違いがある。
本校のカリキュラムについて、再検討の必要性があり、教育に関して言えば現場の方々の協力が必要(内野)

本会議概略まとめ

言語聴覚士-認定補聴器業界の歩み寄りという点では、各委員の賛同が得られている。
しかし、カリキュラム内での具体的なすり合わせまでは至らなかった。
今後は次年度に向けて、補聴器技能者のカリキュラムを本校（言語聴覚士）側も
学び、整合性を精査する。